岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 48

谷尻遺跡赤茂地区

1982年3月

岡 山 県 教 育 委 員 会

文 化 課

序

岡山県は豊かな自然環境に恵まれ、歴史的にも古代から栄えたところであります。このため多くの埋蔵文化財が包蔵されていることから、文化財の保護・保存については特に慎重に対処しておりますが、最近の大規模な開発事業の増加に伴い、文化財包蔵地との競合関係は年々多くなってきております。昭和56年度国庫補助事業として調査を実施しました谷尻遺跡赤茂地区の調査もこうした開発との調整を図り、保護・保存の資料を得ることを目的としたものであります。

谷尻遺跡赤茂地区には、昭和54年度の調査により英賀廃寺の寺域及び主要伽藍配置が確認されていましたが、今回の調査の結果、新たに廃寺のまわりには弥生時代から歴史時代にかけての住居跡や建物跡が検出されました。そして、それら遺構の拡がる範囲は約55000㎡に及ぶもので、備中北部では最も大きい遺跡であることが判明しました。

本報告書は、この調査結果をまとめたものであり、今後の文化財の保護・保存のため活用され、地域の歴史を研究する資料として役立てば幸いでございます。

末筆ではありますが、調査にあたっては専門委員をはじめ、北房町、北房町教育委員会、北房町文化財保護委員会、地権者等関係各位から多大の協力と助言を得ました。そして、地元の多くの方々には発掘作業に従事していただき厚くお礼申し上げます。

昭和57年３月

岡山県教育委員会

教育長　佐　藤　章　一

例　　言

1.　本書は岡山県教育委員会が昭和56年度国庫補助事業を受けて実施した「谷尻遺跡赤茂地区」の発掘調査の概要報告書である。

2.　遺跡は上房郡北房町上水田に所在する。

3.　発掘調査は文化課職員江見正己が担当し、専門委員の指導、助言を得て昭和56年10月26日から昭和57年２月10日まで実施した。

4.　本書の執筆・編集は江見が行った。報告書作成にあたっては亀田菜穂子、清水恵子の協力を得た。

5.　本書に使用したレベル高は仮原点からの高さである。方位は磁北である。

6.　本書第３図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の25000分の1地形図（砦部）を複製したものである。

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経緯 …… 4
第３章　発掘調査の概要 …… 7
　第１節　遺跡の位置と現状 …… 7
　第２節　調査の方法と概要 …… 9
　　Ａ調査区 …… 9
　　Ｂ調査区 …… 16
　　遺　物 …… 22
第４章　まとめ …… 24

図　目　次

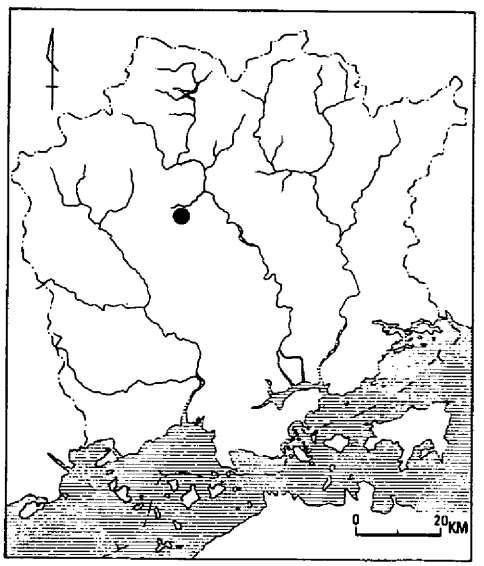
第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　北房町の主要遺跡 …… 2
第３図　谷尻遺跡の周辺遺跡図 …… 7
第４図　トレンチ位置図 …… 8
第５図　Ａ－２、３、５、９、12平・断面図（１／100） …… 10
第６図　Ａ－14、18、22平・断面図（１／100） …… 11
第７図　Ａ－13平・断面図（１／100） …… 12
第８図　Ａ－15平・断面図（１／100） …… 13
第９図　Ａ－15住居址平・断面図（１／60）、及び出土遺物（１／４） …… 14
第10図　Ａ－15建物遺構平・断面図（１／60） …… 15
第11図　Ａ－19、20断面図（１／100） …… 16
第12図　Ｂ－５、９、11、12平・断面図（１／100） …… 17
第13図　Ｂ－９土壙平・断面図（１／30）、及び出土遺物（１／４、１／２） …… 18
第14図　Ｂ－６－Ａ、７、13、16平・断面図（１／100） …… 20
第15図　Ｂ－18、22、23平・断面図（１／100）、及び出土遺物（１／４） …… 21
第16図　出土遺物（１） …… 22
第17図　出土遺物（２） …… 23

図 版 目 次

図版１	１－１	遺跡遠景（南から）
	１－２	Ａ調査区全景（南から）
	１－３	Ｂ調査区全景（南から）
図版２	２－１	Ａ－18遺構検出状況（北東から）
	２－２	Ａ－18、Ｐ－１遺物出土状況（東から）
図版３	３－１	Ａ－６遺構検出状況（南から）
		Ａ－13遺構検出状況（南から）
図版４	４－１	Ａ－15遺構検出状況（東から）
	４－２	Ａ－15住居址検出状況（南から）
図版５	５－１	Ｂ－９土壙検出状況（北から）
	５－２	Ｂ－９土壙内勾玉出土状況（南から）
図版６	６－１	Ｂ－11遺構検出状況（西から）
	６－２	Ｂ－16遺構検出状況（南から）
図版７	７－１	Ｂ－23遺構検出状況（北から）
	７－２	Ｂ－23溝１検出状況（西から）
	７－３	Ｂ－23溝２検出状況（東から）
図版８		各地区出土遺物

第１章　歴史的・地理的環境

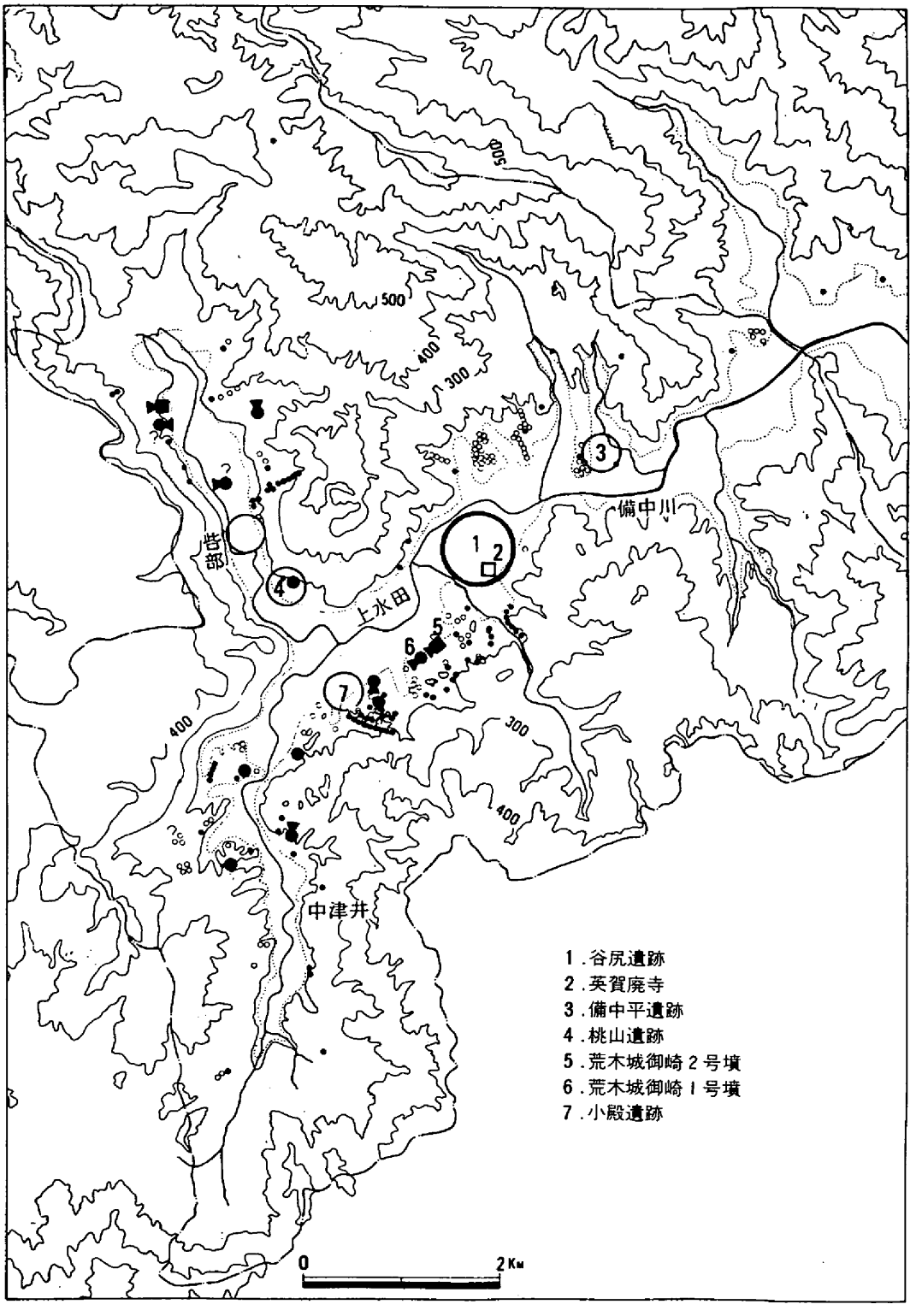
谷尻遺跡は岡山の中北部にある上房郡北房町上水田に所在する。付近一帯は石灰岩地帯で、北房町から新見市にかけては石灰岩の採掘場が多く見られる。また、北房町の西、新見市の南部には阿哲台地と呼ばれている石灰岩地形が見られる。この阿哲台地の豊永付近にはカルスト台地としての地形が見られ、さらに西へ拡がり、広島県東城町の帝釈峡へと続く。



第１図　遺跡位置図

この石灰岩地帯の間を旭川の支流の一つである備中川が流走しており、北房町内においては、砦(あざえ)部を中心とする地域と上水田を中心とする地域に一定の広さとまとまりをもった平地が形成されている。さらに、備中川の支流になる中津川により開析された地域とを合せた地域が、この一帯の中心地を形成している。北房町内で現在までに知られている遺跡は、その大多数がこの周辺に存在しており、それらの遺跡は、この平地を生活の場とした人々によって残されたものである。

北房町内において現在知られている最も古い遺物を出土した所は、中国縦貫道建設に伴って調査された備中平遺跡(註1)、谷尻遺跡（以下、谷尻地区と呼ぶ（註２））空古墳盛土内(註３）などで、楕円及び山形の押型文の土器が出土しており、縄文時代早期まで遡ることが出来る。以後、縄文時代の遺跡は早期から晩期までの遺構遺物を検出した谷尻地区をはじめ、前期及び後期の桃山遺跡（註４）同じく前期の遺構遺物を出土した備中平遺跡などがあげられる。これら縄文時代早期～後期の遺構、遺物は非常に希薄状態であるのに対し、縄文時代晩期になると遺物の出土量が急増する傾向をしめしている。谷尻地区では爪形文を主体にする土器をもつ土壙や、遺跡の北東部分の堆積土中から多くの遺物を出土している。また、遺跡の東方には突帯文土器が出土した地蔵ヶ渕洞穴遺跡（註５）や、落合町ではあるが、貯蔵穴を42基も検出した宮の前遺跡（註６）などが知られている。これらのことは、晩期には美作北西部と備中北東部に比較的共通の生活手段が開拓、実施された可能性を考えさせる。縄文時代晩期に続く弥生時代前期の遺跡は現在のところ僅かに谷尻地区において数片の土器が出土しているだけであり、



第2図　北房町の主要遺跡

新たな遺跡の拡がりは確認されていない。しかしながら中期～後期になると約60基の土壙墓群を検出した谷尻地区をはじめ、町内には10数遺跡知られている。

古墳時代に入ると集落の数はさらにふえるとともに、低位段丘を見おろす丘陵上には数多くの古墳が存在している。中でも、北房町内で最も広く開けた上水田の南の丘陵上には、この地域最古と考えられる全長40ｍの前方後円墳である荒木城御崎２号墳をはじめ、全長60ｍの前方後円墳である同１号墳や、帆立貝式の前方後円墳と考えられる立３号墳などがある。以後北房町内には上水田及び砦部、中津井の３地域を中心にして古墳群が発展している。

歴史時代に入ると法起寺式あるいは観世音寺式の伽藍配置と考えられる英賀廃寺（註７）が建立されている。廃寺は白鳳期に建立され平安時代まで存在したと考えられるが、この廃寺南西約２kmには郡衙に推定されている小殿遺跡が所在し、北東約 1.5kmには備中平遺跡が所在し、奈良時代から中世に至る建物群が検出されている。中世の遺跡は他に谷尻地区からも多くの建物群が検出されている。このように、北房町上水田の一帯は、古墳時代～中世にかけて、備中北部において一大発展をとげた地域である。

註１　田仲満雄・井上弘　「備中平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

註２　高畑知功、山磨康平、井上弘他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976の谷尻遺跡と今回調査を実施した赤茂地区は、直線距離にして約 600ｍほどの極めて近接した位置にある。また、後述するように、この２地区は相互に関連し合っており、谷尻遺跡の中の谷尻及び赤茂地区と理解している。

註３　田仲満雄　「空古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976

註４　田仲満雄　「桃山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　1976

註５　北房町川崎地蔵ヶ渕洞穴入口で採集されている。

註６　二宮治夫、浅倉秀昭他「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976

註７　平井勝　「英賀廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』38　岡山県教育委員会 1980

本章は、井上弘他「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976の第３章を加筆、修正したものである。

第2章　調査の経緯

谷尻遺跡は中国縦貫自動車道路建設に伴い昭和48年から昭和50年にかけての調査により、その一部が明らかにされている。

谷尻から赤茂一帯は古くから遺物の散布がみられ、特に赤茂地区からの出土品は旧北房中学に保管されていた。また、昭和55年にはここに所在する英賀廃寺の寺域及び主要伽藍配置の確認調査を実施した際、寺建立以前及び廃絶以前の遺構・遺物を検出しており、寺域外にも遺構の拡がることが確認されるに至った。

一方、この赤茂地区は町営による圃場整備が進行しつつあり、早急に遺跡の種類・性格・規模等を確認し、遺跡の保護、保存対策を講ずる基礎資料を得るため、昭和56年度国庫補助を受けて発掘調査を実施することになった。

発掘調査は専門委員の指導、助言を得て、昭和56年10月26日から昭和57年２月10日まで実施した。調査にあたっては北房町役場、北房町教育委員会、北房町文化財保護委員をはじめ地権者等関係各位には多大のご協力を得た。また発掘作業にあたっては地元住民の方々に協力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

調査体制

専門委員

鎌木義昌　岡山理科大学教授

近藤義郎　岡山大学教授

水内昌康　岡山女子看護専門学校教頭

岡山県教育庁文化課

早田憲治　課長

吉光一修　課長代理

河本　清　埋蔵文化財係長

田中建治　主　任

松本和男　文化財保護主査

柳瀬昭彦　　〃

平井　勝　文化財保護主事

江見正己　　〃　　（調査担当）

発掘作業員

坂本重吉　坂本芳夫　板谷忠士　清水孫三郎　武村三夫　柳田　勇　柳田一夫　池田春子
坂本絹子　坂本サトエ　坂本芳枝　清水町子　武村百代　山崎綾子

日誌抄

1981年10月26日　発掘調査機材の搬入。

27日　発掘調査開始。Ｂ－11、12、２の掘り下げ。

28日　Ｂ－１、11、12掘り下げ。

29日　Ｂ－２遺構検出作業。Ａ－１、２掘り下げ。Ｂ－11遺構検出作業。

30日　Ａ－１、２、Ｂ－11掘り下げ。

31日　Ａ－１、２掘り下げ、清掃後写真撮影。Ａ－３、４掘り下げ。

11月10日　Ａ－５～９掘り下げ、遺構検出作業。

11日　Ａ－５、７、８掘り下げ、清掃後写真撮影。Ａ－９～11掘り下げ。

12日　Ａ－６遺構検出作業、清掃後写真撮影。Ａ－９～14掘り下げ。

13日　Ａ－11、13遺構検出作業、清掃後写真撮影。Ａ－15～17掘り下げ。

17日　Ａ－13一部拡張。Ａ－14掘り下げ。

18日　Ａ－12、14遺構検出作業、清掃後写真撮影。Ａ－18掘り下げ。

19日　Ａ－19～21掘り下げ。Ａ－１～３平面図作成。

20日　Ａ－10、18清掃後写真撮影。Ａ－19、20掘り下げ。

21日　Ａ－19、20掘り下げ、清掃後写真撮影。Ｂ－３遺構検出作業。

24日　Ｂ－４～10遺構検出作業。

25日　Ｂ４～７遺構検出作業。Ｂ－４、７清掃後写真撮影。

26日　Ｂ－５、６、９遺構検出作業、清掃後写真撮影。Ｂ－８掘り下げ。

28日　Ｂ－８、11、12遺構検出作業、清掃後写真撮影。

12月１日　Ｂ－10、13～15掘り下げ。

２日　Ｂ－10掘り下げ、清掃後写真撮影。Ｂ－13掘り下げ。

３日　Ｂ－14、15清掃後写真撮影。Ｂ－16掘り下げ。

４日　Ｂ－16、17掘り下げ。

７日　Ｂ－18～20掘り下げ。

８日　Ａ－１、２の断面図作成。Ｂ－21、22掘り下げ。

９日　Ｂ－18、20掘り下げ。

10日　Ｂ－16清掃後写真撮影。Ｂ－14～16、18平面図作成。Ｂ－20～22掘り下げ。

11日　Ｂ－17、18、20掘り下げ、清掃後写真撮影。

12日　B－19平面図作成。B－23、24掘り下げ。

13日　B－22平面図作成。B－23、24掘り下げ。

15日　B－23、24清掃後写真撮影。A－13拡張部掘り下げ。

16～19日　A－13、15拡張部掘り下げ。

22日　A－13遺構検出作業。

23日　A－14平・断面図作成。A－13遺構掘り下げ。土器洗い。

1982年1月7日　A－12平面図作成。A－13柱穴群掘り下げ。A－22掘り下げ。

8日　A－13、22掘り下げ。B－23、24平面図作成。

9日　A－6～9平面図作成。A－22清掃後写真撮影。A－23掘り下げ。

11日　A－10、11、18平面図作成。A－13柱穴掘り下げ。

12日　A－13掘り下げ。A－4、5、16平面図作成。

13日　B－1～8、10～12平面図作成。B－15、16断面図作成。

14日　B－13、14、17～22断面図作成。A－15遺構掘り下げ。

18日　B－1～8断面図作成。A－15遺構掘り下げ。B－9拡張部掘り下げ。

19日　B－9拡張部掘り下げ、A－10～13断面図作成。A－15遺構掘り下げ。午後、圃場整備と文化財について町役場、圃場整整備地元役員、町教育委員会と話し合い。

20日　A－4～7断面図作成。B－9遺構掘り下げ。B－1、2埋め戻し。

21日　A－15住居址平面図作成。B－3、4埋め戻し。

22日　A－15住居址掘り下げ。B－9清掃後土層断面写真撮影。B－5～7埋め戻し。

23日　A－16、17、19～21断面図作成。A－13、15全体写真撮影。B－9断面図作成。B－11～14埋め戻し。

26日　B－9断面除去、掘り下げ。B－22～24断面図作成。B－15、16、18埋め戻し。

27日　A－18、22、23断面図作成。B－19～23埋め戻し。

28日　A－15平・断面図作成。B－24、A－19～21埋め戻し。

30日　A－11、12、14、16、17埋め戻し。

2月1日　A－1～4、6～10埋め戻し。

2日　A－13平・断面図作成。A－5、18埋め戻し。

3日　A－22、B－9埋め戻し。

5日　A－13、A－15埋め戻し。

6日　A－13、A－15埋め戻し。

8日　A－13、B－17埋め戻し。発掘機材の整理。

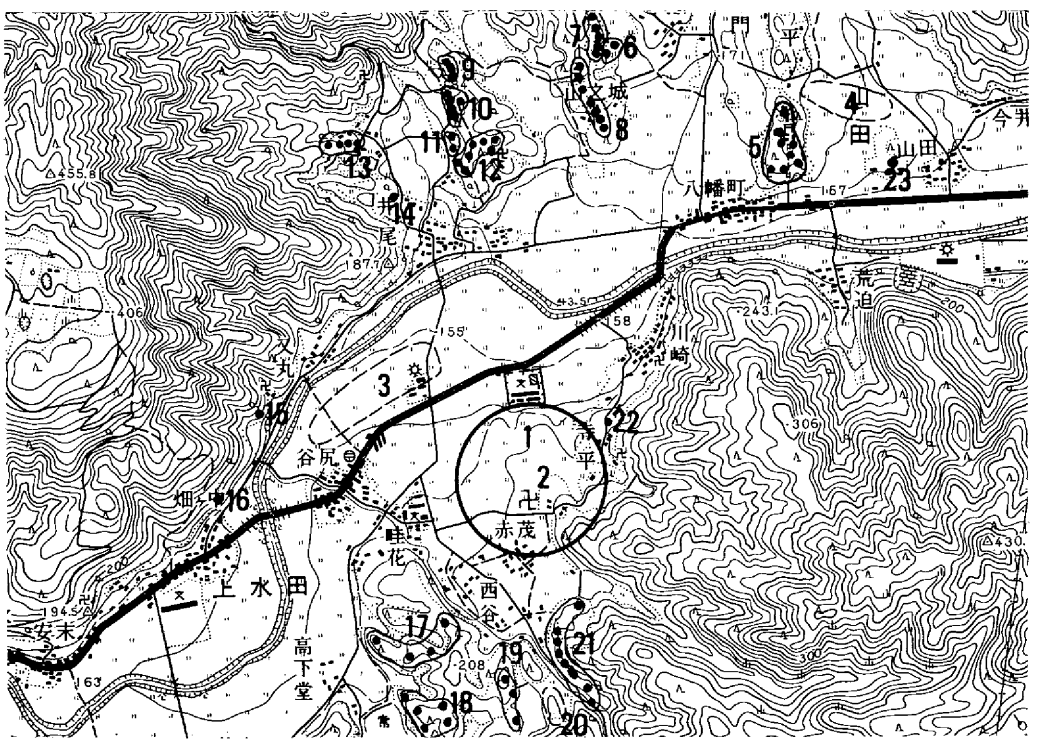
10日　出土遺物及び発掘機材を岡山へ運搬。プレハブ事務所の撤去。

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の位置と現状

谷尻遺跡は上房郡北房町上水田の谷尻から赤茂にかけて位置する。北房町上砦部に水源とする備中川は、上水田で中津井川と合流し、流路を東北に向け東に接する落合町で旭川に注いでいる。谷尻遺跡はこの備中川によって形成された低位段丘上に谷尻地区が立地しており、吉備高原から北に派生する低丘陵の末端から押し出された低台地上に赤茂地区が立地している。

低台地の西には名小路川、東には寺川の小河川が備中川にそそいでいる。低台地の南端には英賀廃寺が所在し、ここから北及び西に向ってゆるやかな傾斜をもって延びており、旧北房中



1.谷尻遺跡赤茂地区　2.英賀廃寺　3.谷尻遺跡谷尻地区　4.備中平遺跡　5.八幡山古墳群
6.高下古墳群　7.広高下古墳群　8.山之城古墳群　9.長そね古墳群　10.赤羽根古墳群
11.東観現寺古墳群　12.観現寺古墳群　13.塚の峠古墳群　14.国重古墳　15.又丸古墳　16.畑中古墳
17.畦の山古墳　18.常の池古墳　19.板谷池古墳群　20.板谷池遺跡　21.愛宕山古墳群
22.赤茂瓦窯跡　23.山田古墳

第３図　谷尻遺跡の周辺遺跡図

第４図　トレンチ位置図

学校付近で低位段丘に移行する。

また、この低台地のほぼ中央には南に向って谷が入り込んでおり、谷の末端の西、備中川に接する部分に谷尻地区が続いている。前節で記述したように、この地区からは縄文時代～中・近世に至る遺構・遺物が検出されたこと、南東部には英賀廃寺が所在すること、英賀廃寺の確認調査で谷尻地区と重複する時代の遺構・遺物の確認を得ていることなどから、この一帯には大規模な遺跡の存在が予想されていた。遺跡の大部分は水田であり、一部畑地となっている。冬期には乳牛の牧草が蒔かれている個所が多い。

第2節　調査の方法と概要

発掘調査は圃場整備が計画されている範囲内の、低台地上を対象として行った。北に延びるこの低台地は、中央に谷が入り込んでおり、この谷の低い所に沿って国道 313号線から赤茂の集落に通じる農道が走っている。調査の都合上、農道から東をA調査区、農道から西をB調査区とした。

発掘調査は3m×5mのトレンチを基本とし、A・B両低台地の中央部及び斜面にかかる部分にトレンチを設定した。

A調査区

A調査区は23のトンンチを設定し、発掘調査を実施した。遺構はA－2～16、22から検出され、A－1、23からの遺構・遺物は皆無であった。また、A－17は周囲の状況から遺構の存在する可能性が強いものの、旧水田を検出したのみで、遺物は皆無であった。以下略述を記す。

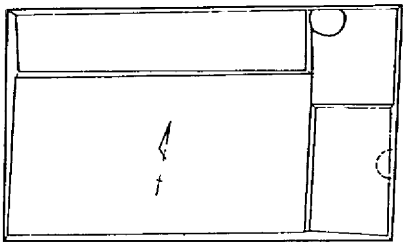
A－2

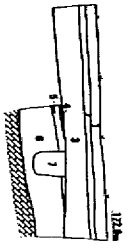
調査区北端に位置する。A－2は6層に分層され、黄褐色の基盤は南に傾斜している。遺物は第3層下面から柱穴2個が検出された。第3層下には部分的に第4層が認められ、基盤層と同様の粘質土であった。同層は南壁の断面でも比較的水平に堆積していることが観察されることから、この一帯は整地されていたものと理解される。なお第3層からは弥生式土器、須恵器、土師器、瓦などの破片が少量出土している。第5・6層は北に傾斜する斜面堆積層であるが、遺物はほとんど含んでおらず、A－1においても確認されたものである。

A－3～12、14、16、18、23

A－2の南に位置し、西側には谷が入り込んでいる。田面は南に行くに従って高くなり、また、西に向うにつれ低くなっている。この地区からは中央谷部における遺跡の拡がり及び台地上の遺構の粗密を確認することが出来た。

中央谷部は、発掘調査開始前の現地踏査の段階では谷が深く入っているため、遺構はこの部分でなくなるものと予想されていたところであったが、A－18からは、西斜面に沿って走る瓦

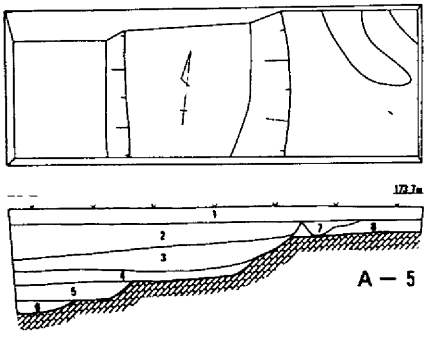




A－2

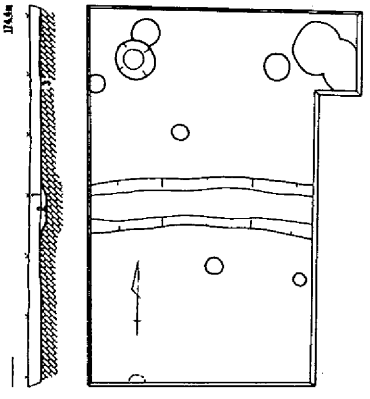
1．耕作土
2．暗灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質土
5．暗茶灰色粘質土
6．暗茶褐色粘質土
7．灰褐色粘質土

A－2



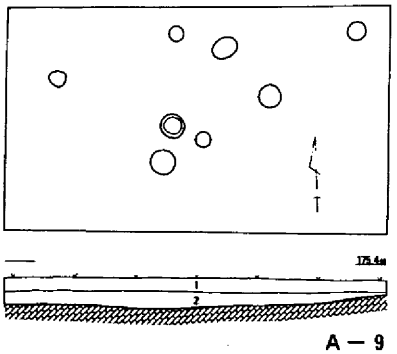
A－5

1．耕作土　2．灰褐色粘質土
3．褐灰色粘質土　4．灰色粘土
5．黄褐色砂質土　6．灰色粘土
7．灰褐色粘質土　8．暗茶褐色粘質土



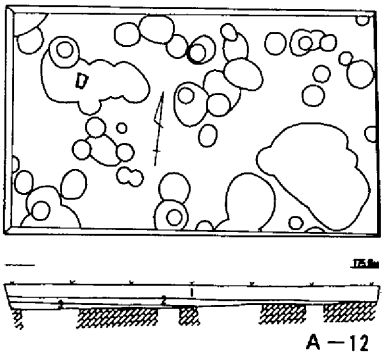
A－3

1．耕作土
2．淡灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質土
4．暗茶褐色粘質土



A－9

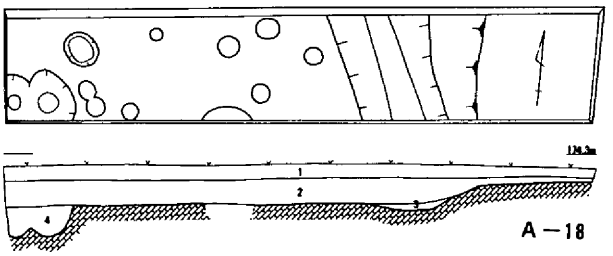
1．耕作土
2．灰褐色砂礫



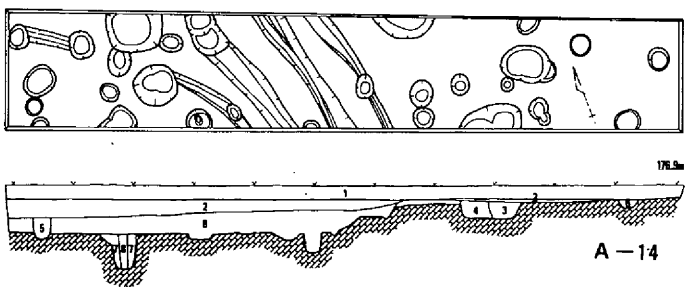
A－12

1．耕作土　2．暗茶褐色粘質土
3．灰褐色粘質土

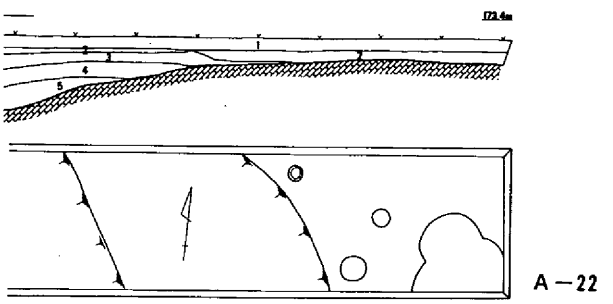
第5図　A－2、3、5、9、12平・断面図(1/100)



1．耕作土
2．灰褐色粘質土
3．灰色粘質土
4．暗茶褐色粘質土



1．耕作土
2．暗茶褐色粘質土
3．黒灰褐色粘質土
4．黒灰色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．灰黒色粘質土
7．暗黄褐色粘質土
8．暗茶色粘質土



1．耕作土
2．灰褐色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．暗茶褐色粘質土
5．暗黄灰色粘質土

第6図　A－14、18、22平・断面図(1/100)

片の混ざる浅い溝や、柱穴が検出された。特に、柱穴の１つからは奈良時代の須恵器の杯身が出土しており、このことから奈良時代には谷部まで、遺構の拡がっていることが確認された。このため、さらにA－22、23の調査を行った結果、A－22において、ようやく斜面堆積を確認するに至った。なお、A－18、22において、遺構は２層下面より検出している。

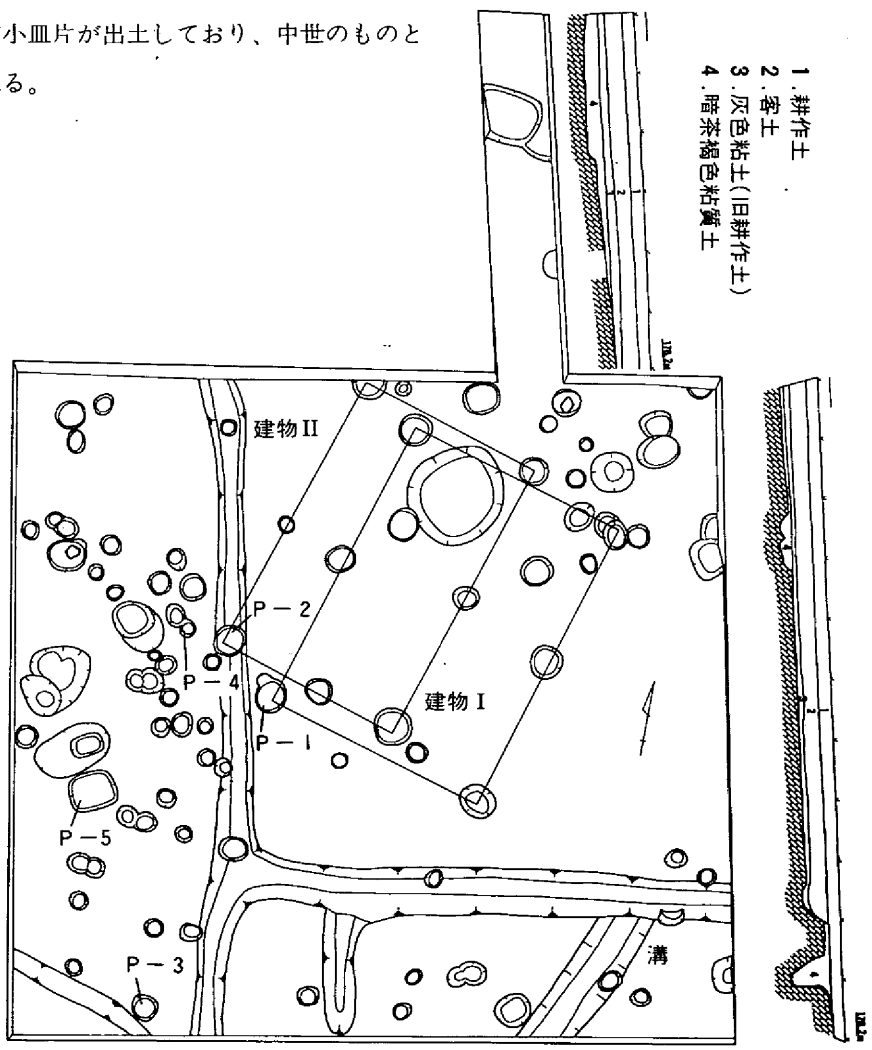
一方、台地上からは耕作土直下から柱穴及び溝が検出されたが、A－12、14付近は特に集中しており、後述するA－13を合せた一帯が、当調査区の中では最も遺構密度の高い所であった。検出された柱穴は直径20cm～50cm前後のものが多く、平面プランが方形を呈すものは検出されなかった。部分的に掘り下げた柱穴の中には、A－14からは弥生時代後期後半の遺物が多く、A－６からは平安時代の小皿、A－９からは備前焼の擂鉢が出土している。

A－13

A－11の南に位置し、遺構の密集度の高い所である。当初３×５ｍのトレンチを設定し調査を実施したところ、建物が想定されたためトレンチを拡張した。

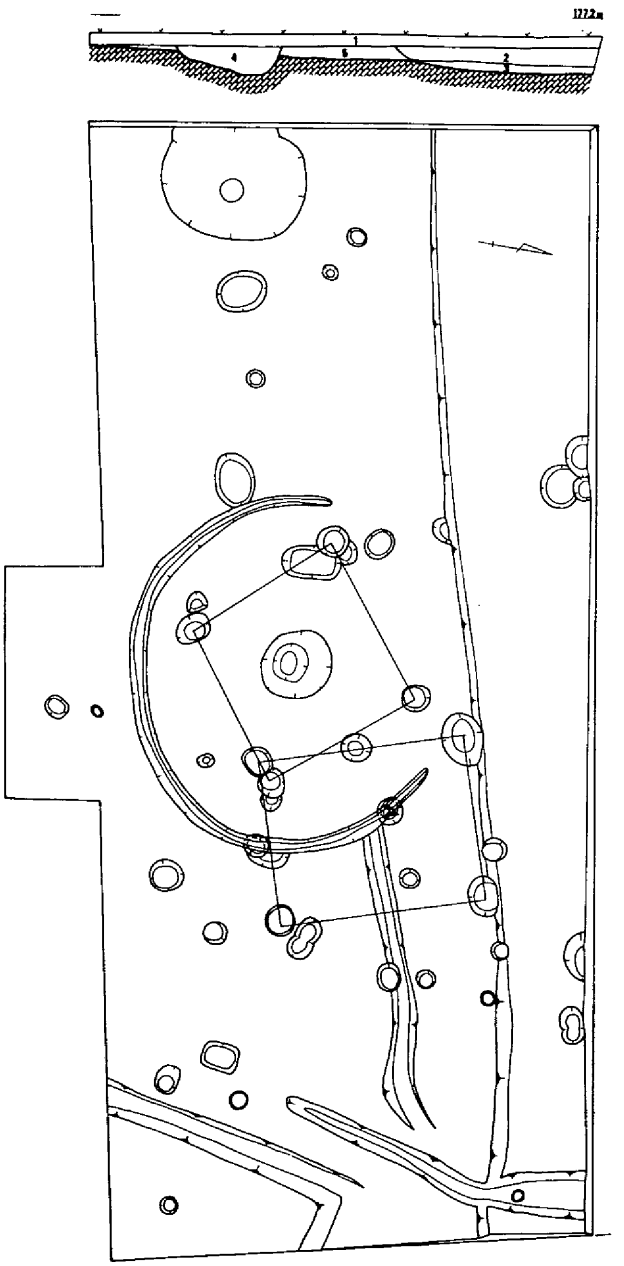
調査の結果、当調査区からは弥生時代後期の住居址状遺構を確認するとともに、建物２棟、溝1条、弥生時代後期～中世にかけての柱穴群が検出された。なお、遺構は耕土あるいは旧水田層（第３層）下から検出され、調査区中央部を走る溝状遺構は旧水田の跡である。

建物Ⅰ　調査区のほぼ中央から検出されたもので、梁間１間、桁行２間の建物である。建物の長軸方向は南北方向を向き、柱の掘り方は円形を呈し、直径40cm前後を測る。建物の規模は梁間３ｍ、桁行 4.1ｍを測る。遺物はＰ－１から土師質小皿片が出土しており、中世のものと考えられる。



第７図　Ａ－13平・断面図(1/100)

建物II　建物Ｉの西側から検出されたもので、建物Ｉと重複している。梁間１間、桁行２間の建物で、建物の長軸方向は建物Ｉと同様、南北方向を向いている。柱の掘り方は円形を呈し、直径40cm前後を測る。建物の規模は建物Ｉより若干小さく、梁間2.5ｍ、桁行3.9ｍを測る。遺物はＰ－２から建物Ｉと同様、小皿片が出土しており、中世のものと考えられる。



第８図　Ａ－15平・断面図(1/100)

溝　調査区南東から検出されたもので、北端は旧水田によって切られている。溝の方向は南北方向を向き、幅70cm、深さ５cmを測る、浅い溝である。溝内には暗茶褐色粘質土が堆積しており、土師質小皿及び土鍋片が出土している。中世の範疇に入るものと考えられる。

他に中世遺物としてはＰ－３から皇宋通宝が出土している。

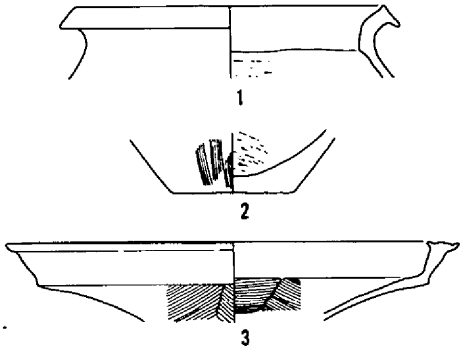
Ａ－15

Ａ－13の南東に位置する。この調査区においても当初の確認調査において、住居址が検出されたため、調査区を拡張した。

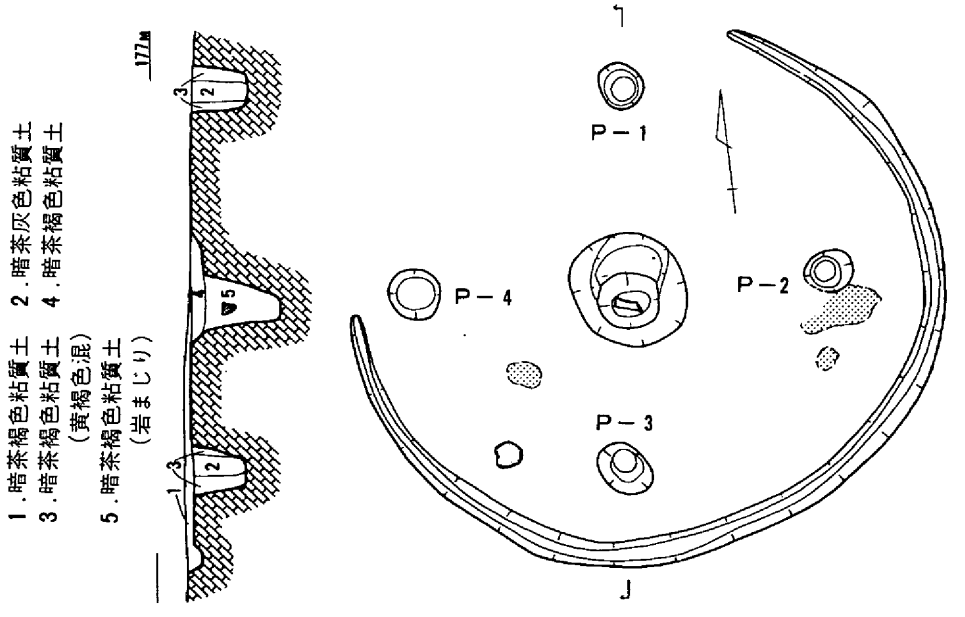
遺構は耕土直下および旧水田層の第３層下から、弥生時代後期住居址１、建物１、円形土壙１、柱穴群などが検出された。なお、調査区の北側約４分の１は旧水田により削平されており、調査区東部分にみられる溝は旧水田の跡である。

住居址　調査区中央から検出されたもので、基盤層が北西に向って、ゆるやかに傾斜しているため、壁体溝は一周していな

い。耕土直下から検出されたが、これまでに相当削平を受けており、残存する壁体溝の深さは僅かに10cmである。平面プランは直径4.5mの円形を呈す。柱穴は4本で、そのうちP－1～3からは直径約15cmを測る柱痕跡が確認された。中央ピットは検出面で85×100cmの楕円形を呈し、ピットの北側部分を一段浅く掘り下げてフラットな面をつくっている。ピット内には暗茶褐色粘質土が堆積しており、下層には炭が多く観察された。またピット中央には長さ20cm、幅10cm、高さ12cmの角礫が入っていた。住居址内には暗茶褐色粘質土が堆積しており、床面付近には炭が散っていた。さらに、床面には焼土が3ヵ所みられ、当住居址は火災を受けたものと考えられる。また、P－3の西からは調理台と思われる径22×18cm、厚さ5cmの丸みをもった礫が床面に密着していた。



遺物は覆土内から数点出土したのみである。甕形土器1は、口縁部が斜め外方に開き、端部は斜め下方に引き出されている。器表面は磨滅が激しく調整は明らかでないが、胴部内面は箆削りしている。2は平底を呈す甕形土器である。外面は刷毛調整、内面は箆削りしている。1、2いずれも淡茶褐色を呈し、2mm前後の砂粒を含む。高杯形土器3は、口縁



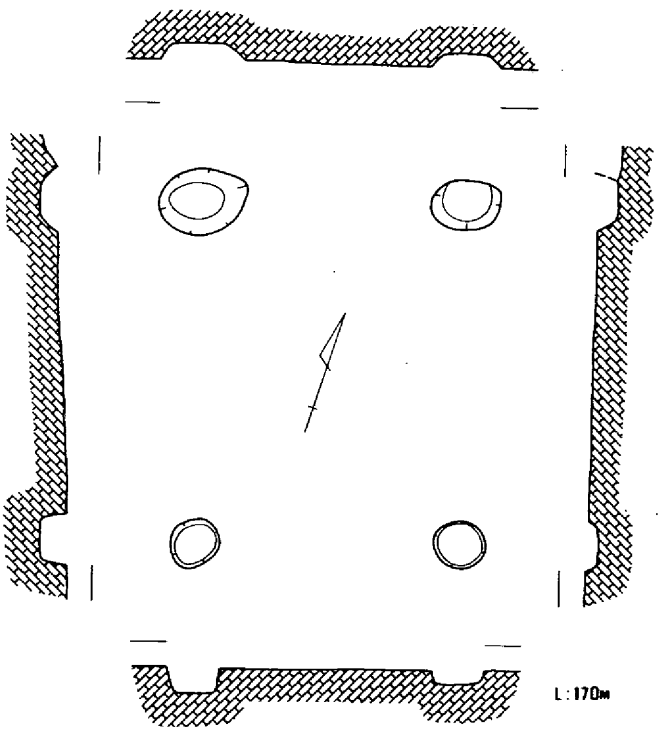
第9図　A－15住居址平・断面図(1/60)、及び出土遺物(1/4)

部が斜め外方に立ち上がり、端部は肥厚し、外方に摘み出されている。杯部は逆「ハ」の字状にすぼまっている。口縁部内外面は横ナデ、杯部内外面は蜘蛛の巣状の箆磨きが施されている。

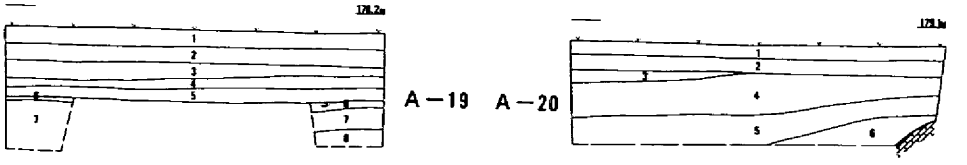
以上、当住居址は出土した土器の特徴から弥生時代後期前半のものと考えられる。

建物　住居址の東から検出されたもので、梁間１間、桁行１間の建物である。建物の長軸方向は南北方向を向き、柱の掘り方は円形を呈し、南側柱穴は直径40cm前後、北側柱穴は50cm前後を測る。建物の規模は梁間2.15ｍ、桁行2.75ｍを測る。遺物はＰ－１から黒色土器片が、Ｐ－２から須恵器皿片が出土しており、平安時代の建物の可能性が強い。

土壙　調査区両端から検出されたもので、140×190cmの、平面プランが楕円形を呈すものである。土壙は擂鉢状を呈しており、深さ45cmを測る。土壙内には暗茶褐色粘質土層が堆積しており、遺物は須恵器及び土師器片が少量出土している。



第10図　Ａ－15建物遺構平・断面図(1/60)



1．耕土　2．灰白色粘度
3．灰色粘土　4．灰褐色粘土
5．淡茶灰色粘質土　6．茶褐色粘質土
7．暗青灰色粘質土　8．青灰色粘土

1．耕作土　2．灰色粘質土
3．暗褐色粘質土　4．暗茶褐色粘質土
5．暗灰色粘質土（細砂混）　6．暗灰色粘質土

第11図　A－19、20断面図(1/100)

A－19～21

英賀廃寺の東にあたり、A－20の水田は一部寺域にかかっている。A－19は耕作土下第4層までは遺物をほとんど含まなかったが、第5層からは比較的多くの瓦片が出土しており、第6層は瓦片及び須恵器を混入する非常に硬く叩き締められた整地面である。しかしながら柱穴等の遺構は確認出来なかった。A－20においてもA－19と同様に硬く叩き締められた状況を呈す部分が第2層下面に検出された。この結果、当地域は、今回調査では遺構の検出は出来なかったものの、英賀廃寺建立後の整地面であることが判明した。なおA－20の下層からは弥生時代～古墳時代にかけての遺物包含層を確認しており、今回調査の対象外になっている東の低丘陵上には遺構の存在する可能性が強い。

A－21はトレンチほぼ中央から東では耕土直下で基盤層に達するのに対し、西は厚さ約5cmの灰褐色粘質土が堆積していた。同層中からは多量の瓦片が出土したが、近隣の調査例から考え合せれば、この粘質土層は旧水田地下げに伴う客土の可能性が強い。なお、A－19、20で検出された整地面は、この部分においては確認されなかった。

B調査区

B調査区は25のトレンチを認定し、発掘調査を実施した。遺構はB－2～B－6－A、B－8～12、B－14～16、B－18、19、22～24から検出された。なお、B－1は当低台地の北端にあたるが、遺構・遺物は皆無であった。またB－17は耕土直下から砂礫と砂質土による洪水層が認められたことから、名小路川以西には遺跡の拡がらないことを確認した。

B－2～5、8、10～12

英賀廃寺の北に位置し、北及び西に向って低くなっている。

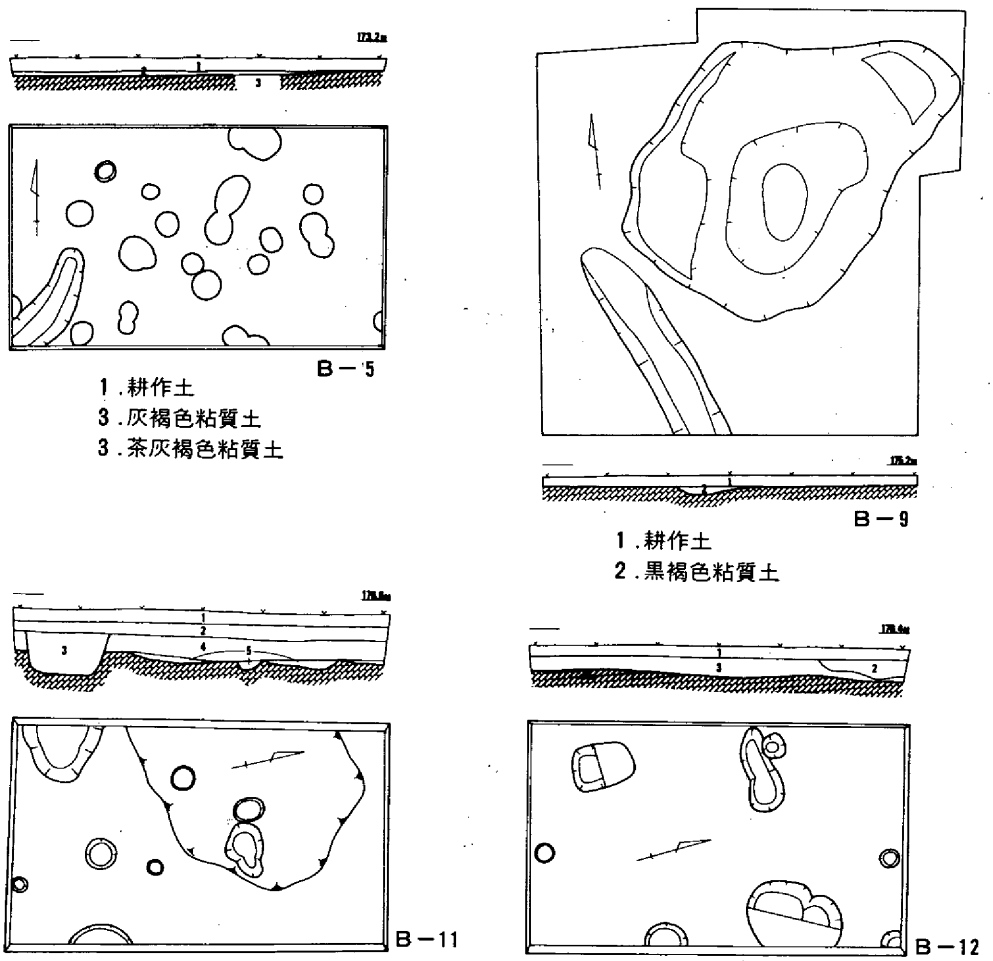
B－11を除き、いずれも耕作土直下から遺構が検出された。またB－2～5、10の遺構は上部の削平を受けているため、その検出は基盤層で行っているのに対し、B－8、11、12は基盤層の上層に暗茶褐色の厚い二次堆積層がみられる。

遺構はB－2から住居址の壁体溝と考えられる浅い溝を確認したのをはじめ、この地区においても多くの柱穴が検出された。これら柱穴は、北部分からは比較的小さな柱穴が、南部分か

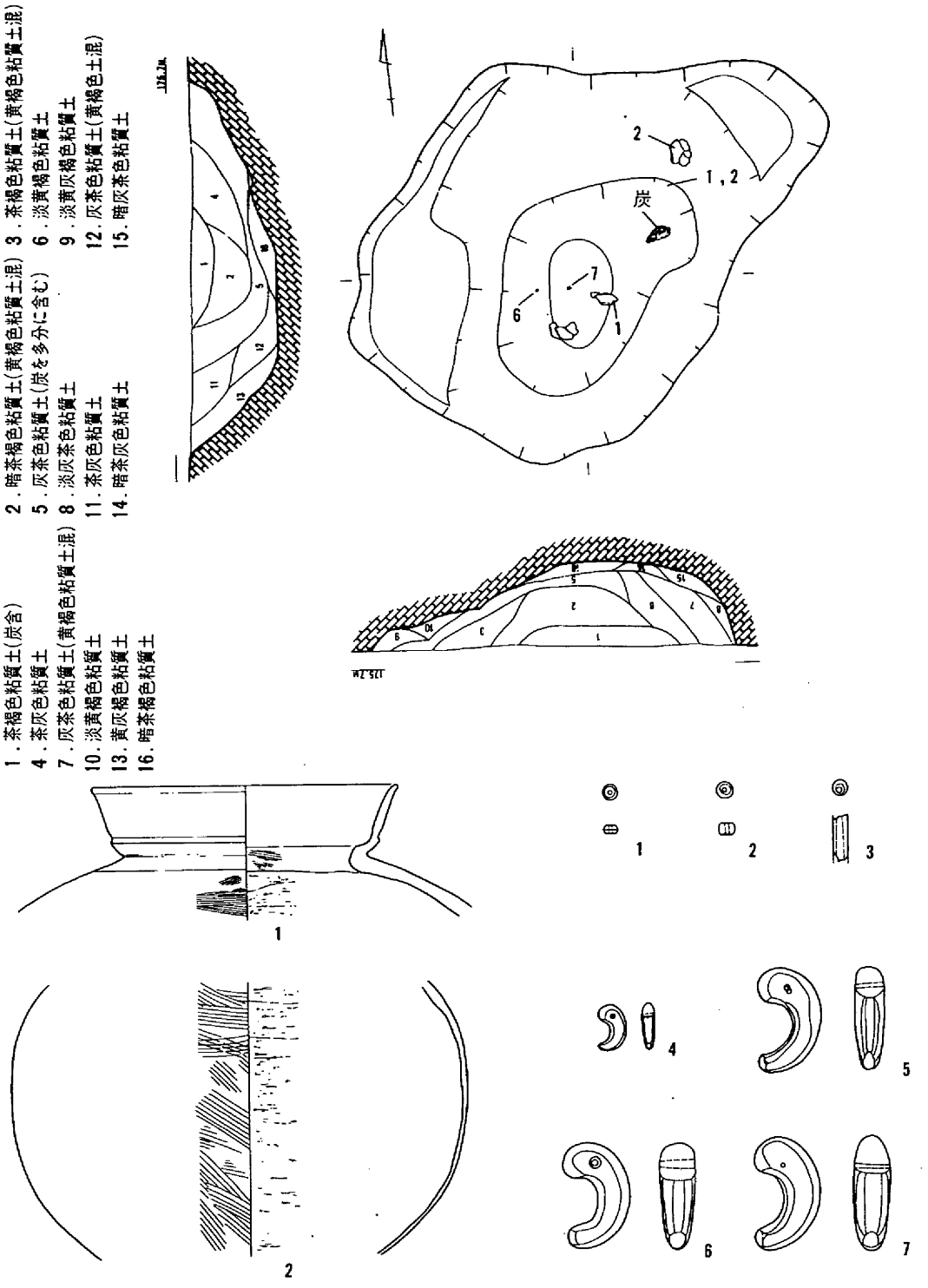
らは大きな径をもつ柱穴が検出された。特にＢ－11からは径110cmの柱穴が、Ｂ－12からは平面プランが方形を呈す柱穴が検出されている。またＢ－11第４層上面には瓦片が多く出土しており、この面が英賀廃寺存続期の整地面と考えられる。

一方、Ｂ－９からは今回調査を行った中で最も古い、弥生時代中期前半の浅い溝が検出されるとともに、溝の北からは古墳時代前半の土壙墓が検出されている。

土壙墓　土壙墓は耕作土直下から検出されたもので、長軸480cm短軸310cmの不整形な土壙で、東西にはややフラットな面がみられ、以下、ゆるい傾斜をもって下っていく。土壙の底部中央



第12図　Ｂ－５、９、11、12平・断面図(1/100)



第13図　B－9土壙平・断面図(1/30)、及び出土遺物(1/4、1/2)

はややフラットな面が認められる。土壙内は、主に暗茶褐色の粘質土及び基盤層の黄褐色粘質土ブロックに炭が混入するという状態であった。断面観察からすれば、第２層あるいは第５層において、急な落ち込みが認められたが、棺を推定させるような土層状況は確認出来なかった。

床面に接して出土した遺物は土壙中央から勾玉（７）が、北東部から滑石製臼玉（１）、及びガラス小玉（２）が出土しており、この北東からは胴部内面を上に向けた甕形土器が、土壙の傾斜に合せた状態で検出された。

一方、土壙中央付近からは同一個体と考えられる壺形土器の胴部上半及び中央の破片が、床面より若干浮いた状態で出土している。なお、これらと同一の壺形土器片は第２及び第５層付近から比較的多く出土した。また、勾玉（６）は第２層中央付近から、管玉（３）及び勾玉(4、5）は、土壙北東部分の、遺構検出面から深さ約10cm程下った所から出土したものである。

壺形土器１は口縁部が斜め外方にやや外反気味に立ち上り、端部は丸くおさめている。胴部は大きく外方に張り、球形を呈すものと思われる。口縁内外面は横ナデ、胴部外面は斜めから横方向の刷毛調整、頸部内面は刷毛調整後、横ナデ、胴部は箆削りしている。

甕形土器２は口縁部及び底部が欠損している。胴部外面は荒い刷毛調整、内面は箆削りしており、器壁は薄い。

滑石製臼玉（１）は中央部に稜線をもつもので、濃紺色を呈し、最大径0.4cm、孔の径0.18cm、厚さ0.28cmを測る。

ガラス小玉（２）は淡青色を呈し、最大径0.5cm、孔の径0.17cm、厚さ0.4cmを測る。

管玉（３）は淡緑灰色を呈す緑色凝灰岩。径0.45cm、孔の最大径0.22cmを測る。

勾玉（４）は青緑色を呈す滑石製で、長さ1.4cm、幅0.4cmを測り、片側穿孔。

勾玉（５）は赤灰褐色を呈す蛇紋岩。長さ3.18cm、幅0.9cmを測り、両側穿孔。

勾玉（６）は濃緑色を呈す碧玉。長さ3.2cm、幅1.1cm、を測り、片側穿孔。

勾玉（７）は淡緑灰色を呈す緑色凝灰岩。長さ3.4cm、幅1.15cmを測り、片側穿孔。

以上、遺構、遺物の概略を記したが、遺物の出土状態及び土層観察から、当土壙は具体的な埋葬状態を復原するには至らなかったものの、出土遺物から古墳時代初頭、谷尻地区のⅤ期あるいはⅥ期（註８）の範疇のものであると考えられる。

Ｂ－６－Ａ～７、13～16

低台地の西にあたり、台地上より２ｍ近く低く位置する。この調査区において、遺跡の西端を把えることが出来た。

Ｂ－６－Ａでは耕作土直下から基盤層に掘り込まれた柱穴１個を検出した。このため、Ｂ－６－Ｂ、Ｂ－７を設定し調査を実施したところ、第３層の暗茶灰色粘質土からは、若干の遺物を含むものの、斜面堆積の状況を呈しており、この下層の精査においても遺構の確認がなされ

なかった。なお、確認されたＢ－６－Ａの柱穴を掘り下げた結果、深さは約10cmの非常に浅いものであったことから、この一帯の遺構は相当削平を受けているものと思われる。

一方、Ｂ－14～16の調査では上記と同様に、耕作土直下から遺構が検出され、Ｂ－13では第３層の斜面堆積土中から瓦片などの遺物が出土したものの、遺構は検出されなかった。

遺物は弥生時代後期の土器片、古墳時代の須恵器、土師器などの砂片が出土している。

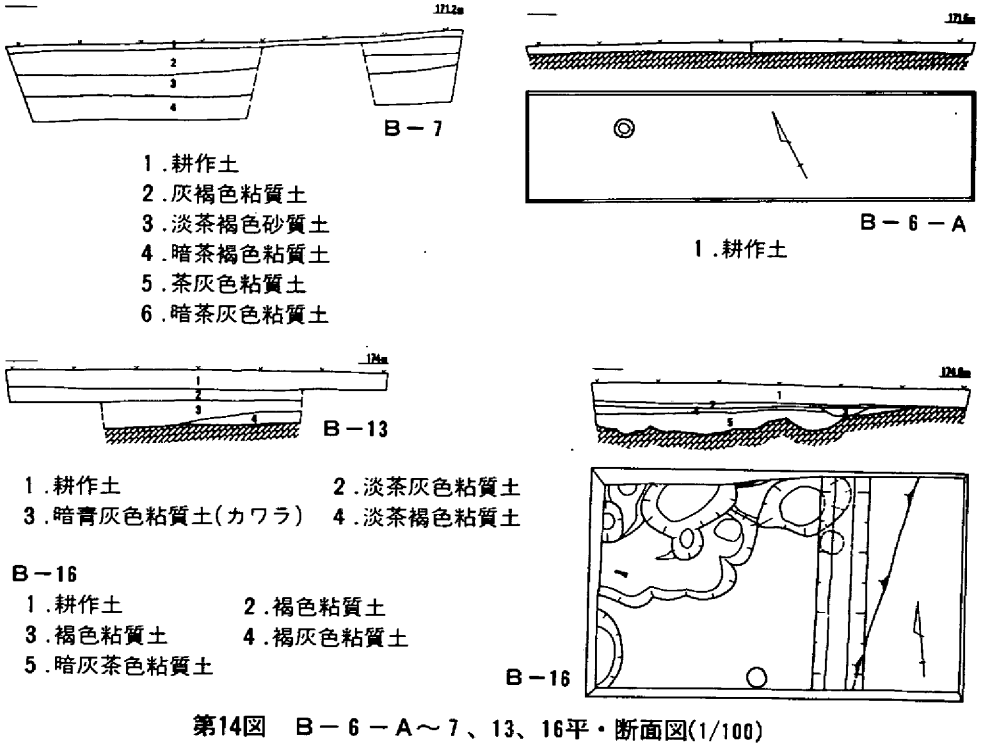
Ｂ－18～24

この調査区からは遺跡の南限を把えるとともに、Ｂ－23からは英賀廃寺に関連すると思われる溝状遺構が検出された。

溝１　調査区南端から検出されたもので、溝は第４層下から掘り込んでいる。推定幅230cm、深さ 100cmを測る、東西方向に走る。溝内堆積土はいずれも粘質土で、第７層内からは須恵器椀１が出土している。

須恵器椀１は高台のつくもので、体部は斜め外方に立ち上がり、口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめている。高台は低く、僅かに外方にふんばる。以上、須恵器の形態から、奈良時代後半のものと考えられる。

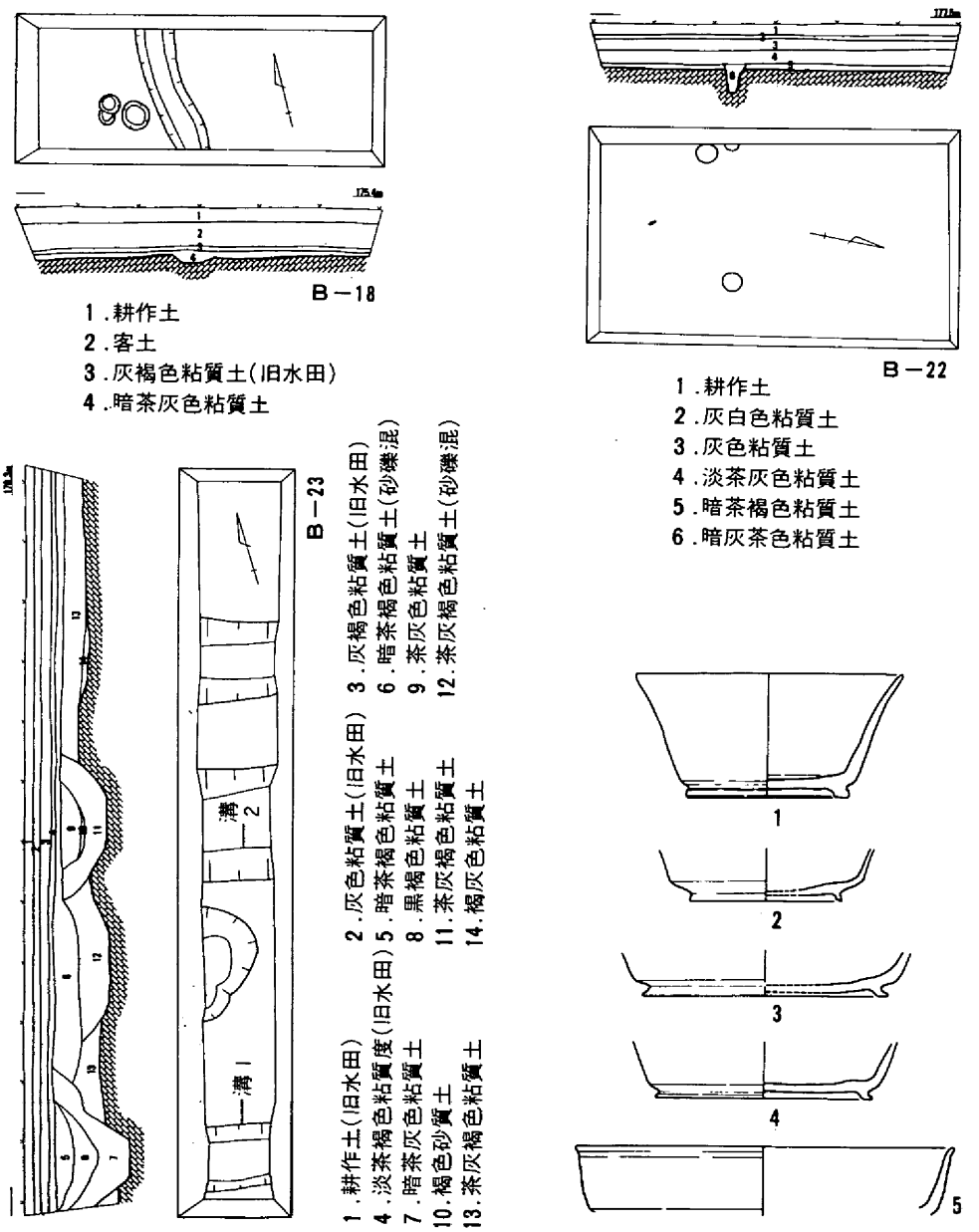
溝２　溝１の北に平行して検出されたもので、溝は第８層下から掘り込んでいる。幅 190cm、深さ60cmを測る。溝内堆積土は中央部に砂層をはさむ粘質土である。



第14図　Ｂ－６－Ａ～７、13、16平・断面図(1/100)

溝内からは須恵器杯身２～４が出土している。いずれも高台をもつもので、２はやや小形のものである。口縁部がいずれも欠損しているため断定は出来ないが、高台の形態から溝１出土椀１よりは先行するようである。なお、５は第８層出土の丹塗りの土師質杯である。

以上、Ｂ－23からは２条の東西方向に走る溝が検出されたが、時期的に英賀廃寺と一致する



第15図　Ｂ－18、22、23、平・断面図(１/100)、及び出土遺跡(1/4)

遺構を確認したことは大きな成果であった。

この他、A－18においては耕作土下、第3層までは、旧水田の客土及び水田層で、その下層からは弥生時代後期の溝が検出され、B－22においても第4層下から柱穴を検出している。

一方、B－21においては、耕作土下約30cmで茶褐色砂礫層に達するが、この間耕作土中には遺物が若干含まれるものの、下層の灰白色粘質土は無遺物層であり、基盤層上面からの遺構・遺物も皆無であったことから、遺跡はこの付近が南限を示すものと判断される。

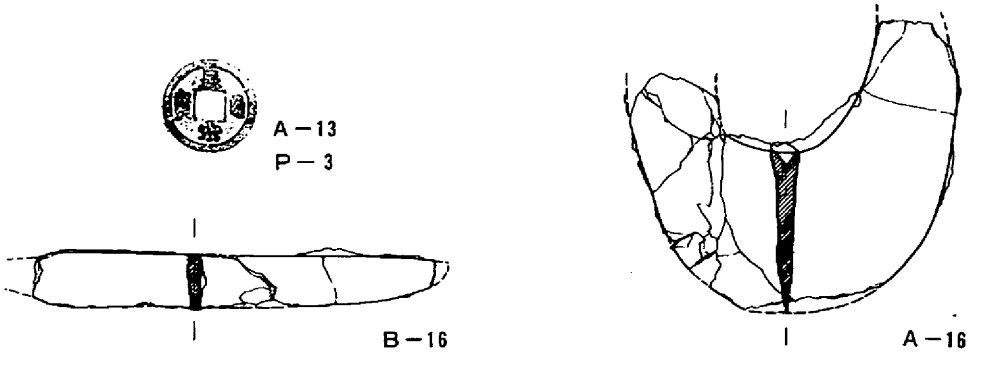
遺物

今回の調査では、遺跡の範囲確認が主目的のため、遺構を掘り下げた部分は少なく、耕土及び、耕作土直下の遺構検出の際に出土したものである。にもかかわらず、遺跡からは弥生時代から中世の長期にわたる遺物が出土した。

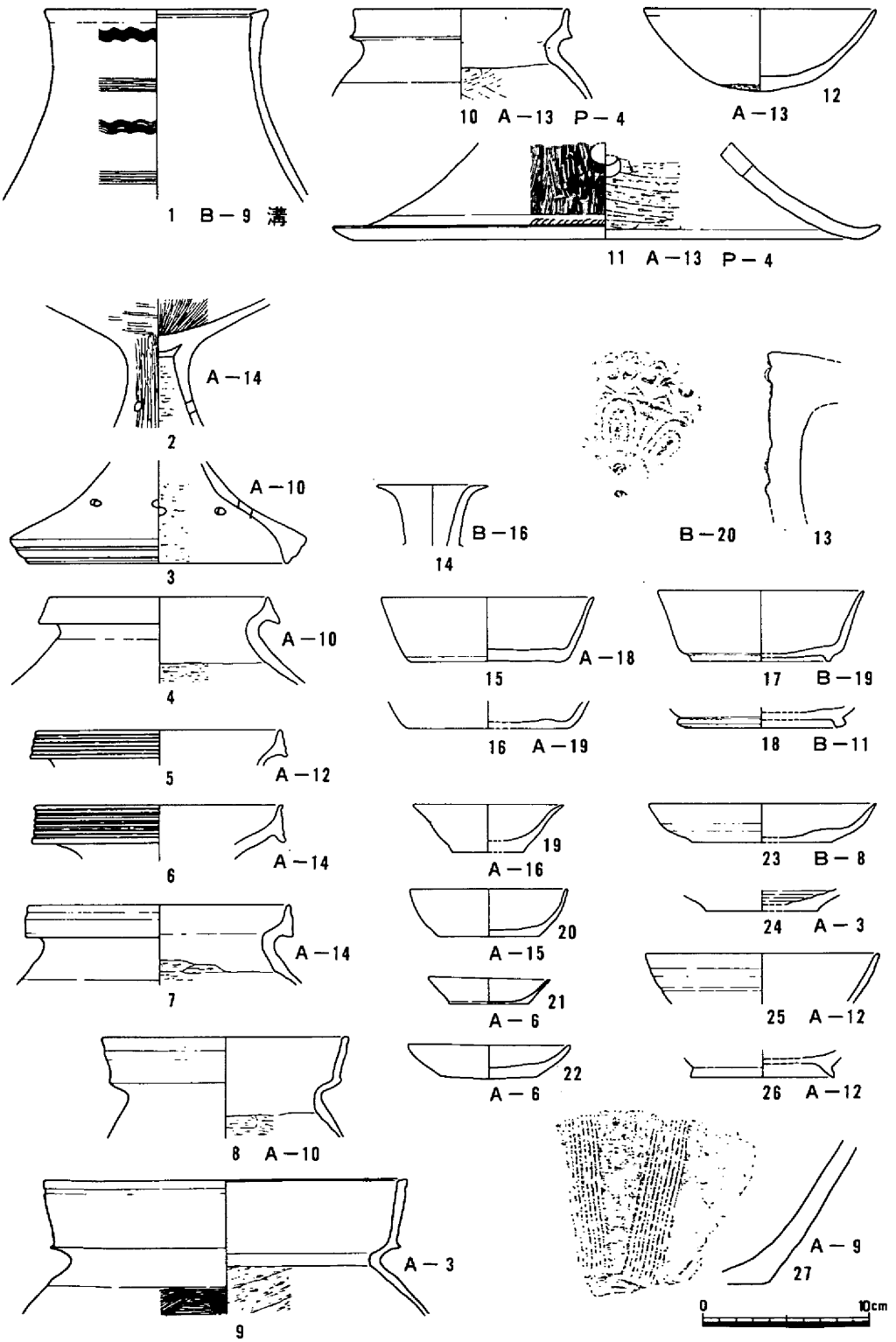
今回の調査で出土した中で、最も古いものとしては弥生時代中期前半の壺形土器1がある。以後、弥生時代中期後半の遺物はB－11で確認している。弥生時代後期の遺物（2～7）は主にA区から出土しており、古墳時代の土器（8～12）も同様のことが言える。英賀廃寺が建立され廃絶した白鳳～平安時代にかけての遺物（13～26)、及び中世の遺物（27）は遺跡全体から出土している。

なお、A－13のP－3からは宋銭の「皇宋通宝」が出土しており、刀子及び、U字形鋤先はいずれも旧水田下面から出土したものである。

註8　註2に同じ。また、岡山県南部における亀川上層併行期のものと思われる。



第16図　出土遺物（1）


1 B－9 溝
10 A－13 P－4
12 A－13
11 A－13 P－4
A－14
2
A－10
3
B－16
14
B－20
13
A－10
4
15 A－18
17 B－19
16 A－19
18 B－11
5 A－12
6 A－14
19 A－16
23 B－8
24 A－3
A－14
7
20 A－15
21 A－6
25 A－12
22 A－6
26 A－12
8 A－10
A－3
9
A－9
27
0 10cm

第17図　出土遺物（２）

第4章　まとめ

谷尻遺跡赤茂地区の調査は、A、B両調査区に、48のトレンチを入れることによって、遺跡の拡がりと、内容を、より具体的に把握することが出来た。発掘調査により、当赤茂地区の遺跡の範囲は55000m²におよぶ大規模な面積をもつ遺跡であることが判明するとともに、その遺跡の及ぶ時代は、弥生時代中期～中世に至るものであることが明らかになった。ここでは、発掘調査によって明らかにされている谷尻地区の調査結果と比較検討することによって、まとめに変えたい。

谷尻地区は赤茂地区の北西約 600mの低位段丘上に立地する、縄文時代早期～中・近世にかけての遺跡である。中でも当遺跡の存在を顕著に表すものは弥生時代後期の土壙墓群である。土壙墓は第5調査区から約60基検出されているが、同時期の住居址は検出されていない。一方、赤茂地区ではA－13において1軒確認しており、A－15では発掘調査により、弥生時代後期前半の住居址の存在が明らかにされた。

以後、弥生時代後半～古墳時代初頭にかけては谷尻・赤茂両地区はそれぞれの集落としての発展が窺える。しかしながら古墳時代前半になると前述とは逆に、赤茂地区から土壙墓が検出されているのに対し、谷尻地区では、住居址が前代から引き続き建てられているが、土壙墓は検出されていない。さらに古墳時代後期、5世紀末～6世紀末にかけての谷尻地区では11軒もの住居址が明らかにされたが、赤茂地区からの遺構・遺物は皆無であった。

以後、英賀廃寺が存続した白鳳から平安時代にかけては、遺跡の立地からか、赤茂地区から比較的多く柱穴類を確認することが出来た。その後、中世に至っては、赤茂・谷尻両地区とも飛躍的に展開していったものと思われる。

以上列記したように谷尻地区と赤茂地区は時代の経過の中で、相互に関連し合っており、また、付近に所在する前期古墳や、英賀廃寺との関連を考えれば、今回確認された赤茂地区（55000m²）と谷尻地区を合わせた谷尻遺跡は、備中北部における中心的遺跡であり、当地域の母体的存在の遺跡であると言っても過言ではないであろう。

1－1　遺跡遠景（南から）

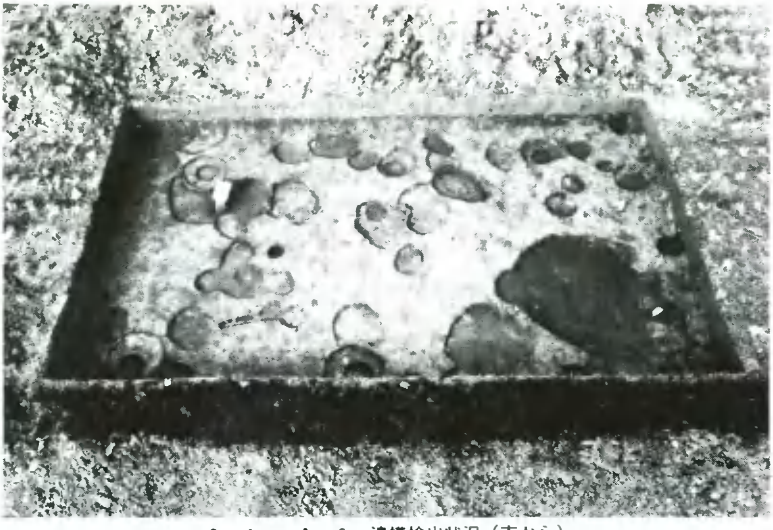
1－2　A調査区全景（南から）

1－3　B調査区全景（南から）

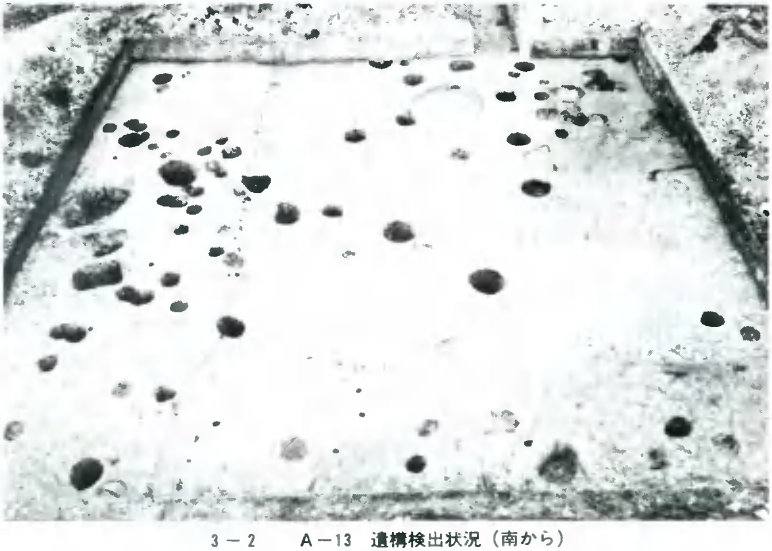
図版 2

2－1　　A－18　遺構検出状況（北東から）

2－2　　A－18、P－1　遺物出土状況（東から）

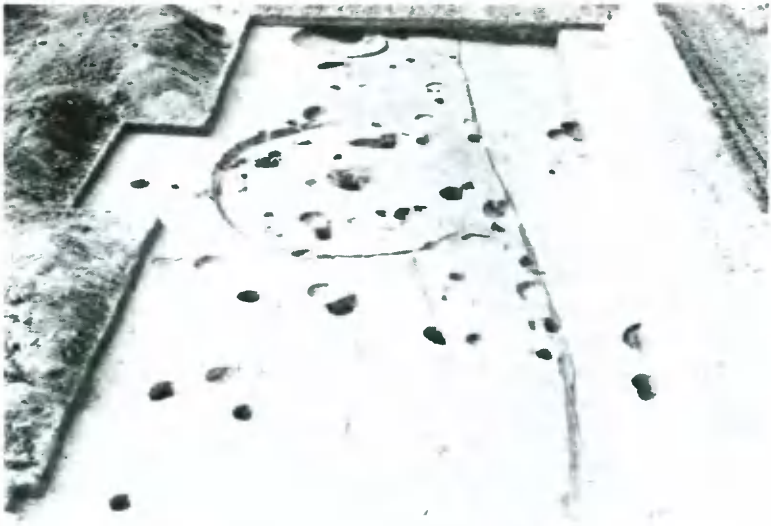


3－1　　A－6　遺構検出状況（南から）



3－2　　A－13　遺構検出状況（南から）

図版 4



4 － 1　　A －15　遺構検出状況（東から）

4 － 2　　A －15　住居址検出状況（南から）

5－1　　B－9　土壙検出状況（北から）

5－2　　B－9　土壙内勾玉出土状況（南から）

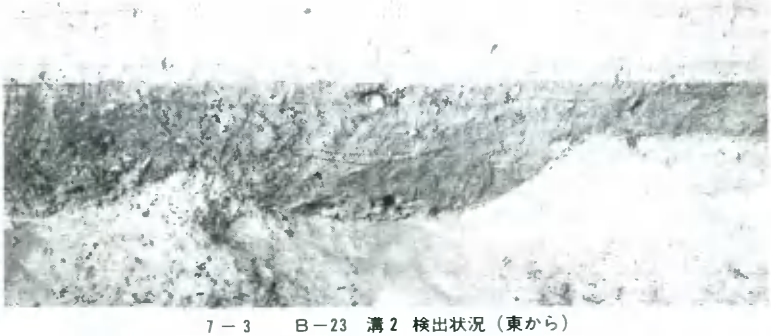
図版 6

6－1　　B－12　遺構検出状況（西から）

6－2　　B－16　遺構検出状況（南から）

7－1　　B－23　遺構検出状況（北から）

7－2　　B－23　溝 1　検出状況（西から）



7－3　　B－23　溝 2　検出状況（東から）

図版 8

A－15 住居址

A－3

B－23 溝1

B－20

A－18

A－6

B－9 土壙

4

1

2

3

5

6

7

出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 48

谷尻遺跡赤茂地区

昭和57年 3 月15日印刷
昭和57年 3 月31日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　岡山県出納局用度課